2023.10.18 第１３回霊的講話　「イエス様に出会った女性⑥」

おはようございます。朝晩は肌寒いほど、秋も深くなりましたね。

今日は二学期最後の霊的講話です。１１月からは待降節の祈りが始まります。クリスマスも次第に近づいてきたということですね。

さて、先週は新約聖書のマルコによる福音書５章２１節から４３節をお読みしました。今日はその二回目ですが、高校２年の皆さんは研修旅行でおられなかったので、この聖書の箇所をもう一度お読みしたいと思います。新約聖書の７０ページを開いてください。新約聖書のマルコによる福音書５章２１節から４３節までです。

「イエスが舟に乗って再び向こう岸に渡られると、大勢の群衆がそばに集まって来た。イエスは湖のほとりにおられた。会堂長の一人でヤイロという名の人が来て、イエスを見ると足もとにひれ伏して、しきりに願った。『わたしの幼い娘が死にそうです。どうか、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かり、生きるでしょう。』そこで、イエスはヤイロと一緒に出かけて行かれた。大勢の群衆も、イエスに従い、押し迫って来た。さて、ここに十二年間も出血の止まらない女がいた。多くの医者にかかって、ひどく苦しめられ、全財産を使い果たしても何の役にも立たず、ますます悪くなるだけであった。イエスのことを聞いて、群衆の中に紛れ込み、後ろからイエスの服に触れた。『この方の服にでも触れればいやしていただける』と思ったからである。すると、すぐ出血が全く止まって病気がいやされたことを体に感じた。イエスは、自分の内から力が出て行ったことに気づいて、群衆の中で振り返り、『わたしの服に触れたのはだれか』と言われた。そこで、弟子たちは言った。『群衆があなたに押し迫っているのがお分かりでしょう。それなのに、「だれがわたしに触れたのか」とおっしゃるのですか。』しかし、イエスは、触れた者を見つけようと、辺りを見回しておられた。女は自分の身に起こったことを知って恐ろしくなり、震えながら進み出てひれ伏し、すべてをありのまま話した。イエスは言われた。『娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。もうその病気にかからず、元気に暮らしなさい。』イエスがまだ話しておられるときに、会堂長の家から人々が来て言った。『お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう。』イエスはその話をそばで聞いて、『恐れることはない。ただ信じなさい』と会堂長に言われた。そして、ペトロ、ヤコブ、またヤコブの兄弟ヨハネのほかは、だれもついて来ることをお許しにならなかった。一行は会堂長の家に着いた。イエスは人々が大声で泣きわめいて騒いでいるのを見て、家の中に入り、人々に言われた。『なぜ、泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ。』人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスは皆を外に出し、子供の両親と三人の弟子だけを連れて、子供のいる所へ入って行かれた。そして、子供の手を取って、『タリタ、

クム』と言われた。これは、『少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい』という意味である。少女はすぐに起き上がって、歩きだした。もう十二歳になっていたからである。それを見るや、人々は驚きのあまり我を忘れた。イエスはこのことをだれにも知らせないようにと厳しく命じ、また、食べ物を少女に与えるようにと言われた。」

前回は、この箇所から、病人を癒やし、死人をよみがえらせるという不思議な出来事、「イエスが行った奇蹟」とよばれる出来事についてお話しました。その後、主に高校３年の皆さんの霊的講話ノートを読ませていただきました。「この出来事を事実として信じる」という人もおられましたが、「とても事実とは思われない」という正直な感想もありました。私自身はこの出来事を事実と信じていますが、もちろん、最初からそのように信じていたわけではありませんし、「信じられない！」という皆さんの思いもよく分かります。でも、たとえ事実かどうか分からなくても、この聖書の箇所から大切な真理を学ぶことはできると思います。今日はその観点から、主に病気を癒された女性について考えたいと思います。

会堂長ヤイロの家に行く途中で、イエス様は「十二年間も出血の止まらない」病気であった女性に出会います。この女性はおそらく女性特有の病気に長年苛まれ、正常な生活もできず、財産も使い果たして貧困にも苦しんでいたことでしょう。そして、イエス様の元に来てその衣に触れたとき、彼女の出血はとまり、激しい痛みもなくなり、彼女は自分が癒やされたことを全身で感じ取ったのです。

さて、弟子が「群衆があなたに押し迫っている」と言ったとおり、この時、多くの群衆がイエス様の間近まで迫っていました。押し合いへし合いしながらイエス様に触れてしまった人もたくさんいたでしょう。しかし、病気が癒されるという経験したのはこの女性だけでした。では、多くの群衆とこの女性とでは何が違っていたのでしょうか。それは、この女性だけが「イエス様であれば、この病を癒やしてくださる」という願いと期待を抱いてイエス様に近づいたということです。これが彼女の信仰でした。信仰とは、一定の教理つまり教えを学ぶことでも、宗教の戒律や儀式を守ることでもありません。信仰とは、神様に、そしてイエス・キリストに単純に信頼するということです。この女性はイエス様に信頼し、そして必死の思いでイエス様に近づいたのだと思います。

この時と同じように、現在でも多くの人々がイエス・キリストの周囲に集まっています。イエス・キリストは歴史上でも最も有名な人物の一人です。多くの人がイエス・キリストについて語り、研究し、議論をし、中には「自分はキリストやキリスト教のことはよく知っている」と自負する人もいます。でも、この女性のように、求める心、どうしても救われたいという思いをもってイエス様に近づくは多くはないのかもしれません。

自分のことをお話しして恐縮ですが、中学・高校時代の私もこの群衆と同じでした。皆さんと同じようにカトリックのミッションスクールに通っていた私は、宗教の時間を担当して

おられた神父様から「神の存在は証明できる」と教えられました。でも、私は自分なりにいろいろと考えて「無限の存在であるはずの神の存在を、有限の人間が科学的に証明できるわけがない」と結論づけました。当時の私は、あの群衆と同じように、知的な好奇心や関心だけで神様やイエス様の周囲に集まり、議論していただけだったのだと思います。

しかし、高校３年生になった頃、私はいろいろなことで悩み始めました。優越感や劣等感に振り回される自分が嫌でしたし、大学受験も結構な重荷に感じました。そして「こんなに苦労して生きていても、人生に意味も目的もないのなら、虚しいなぁ…」と考えていました。そして、もう一度、神について考え始めました。もし本当に神が存在し、その神が私をも創られたのなら、私の存在には意味も目的もあると考えたからです。そして大学に入ってからはかなり一生懸命に聖書を読み、考え、そして、「もし無限で、しかも人格的な神が存在するのなら、私に納得のいく形で、その存在を教えて欲しい」と祈りました。その時は、このイエス様の元に来た女性に、少しは似ていたのかもしれませんね。やがて私は、神は存在するという事実に私なりに納得し、また、イエス・キリストを信じる決心をしたのです。考えて議論することと神に祈り求めることは異なるのだということを私は学びました。
皆さんはどのように考えられるでしょうか？

それでは、最後に、「主の祈り」をともに祈りましょう。